京都大学	博士(文学)	氏名	田　鍋　良　臣
論文題目	始源の思索 ―― ハイデッガーと形而上学の問題 ――		

（論文内容の要旨）

一　問題と目的

本論文の考察は、ハイデッガーの『存在と時間』の未完の構想について、その本質と企図を明らかにしようとすることによって導かれる。

近年、『存在と時間』公刊以前の講義録や論考が出揃いつつあることにより、ハイデッガーの思索形成に果たした古代形而上学（プラトン、アリストテレス）の影響がますます注目されるようになっている。昨今では、これまで読者を悩ませてきた『存在と時間』の独特な難語（いわゆる「ハイデッガー語」）のほとんどが、古代ギリシア哲学からの直訳であると暴露されるまでになってきている。これらの研究成果は目を見張るものであり、テキスト上の制約があった時期の研究に比して、たしかに隔世の感を抱かせるものである。だが、こうした研究は、従来謎に包まれていた『存在と時間』成立の背景や舞台裏の「種明かし」に終始する面が強く、いきおい、ハイデッガー哲学の功績を古代哲学の新たな「復興」や「反復」に見出す傾向にある。

しかしながら、『存在と時間』の冒頭で『ソピステス』の一節が掲げられたのは、何かプラトン哲学の忠実な継承や古代哲学の復興のためではない。むしろ西洋形而上学の開祖であるプラトンにおいてさえも、存在の問いに対する「答え」が欠けており、そもそも存在がそのものとしては明確に問われておらず、それ以後の哲学史の展開においても適切な問いが一度として立てられたことはない、という哲学史上の「困惑」を強調するためであった。この歴史的な洞察こそ、ハイデッガーをして「存在の意味への問いを新たに立てること」へ駆り立てた、いわゆる「存在忘却」の史実に他ならない。ハイデッガーが存在の問いを通じて哲学史の「解体」を提唱するのは、形而上学の始まりと共に隠蔽され続けてきたこの存在の根本経験を再び根源的に覚醒させることで、哲学・形而上学の歴史に先立つより始源的な領域を開拓せんと意図してのことなのである。

本論文は、ハイデッガーのこうした思索課題を最大限尊重し、この著作の本質を問おうとする。上記の問題設定からすれば、「ハイデッガーと形而上学の問題」とはハイデッガーにおける道具立て（翻訳作業）の文献学的・歴史学的な考証などを指すのではなく、存在の問いを手引きとして哲学・形而上学の始源へ向う彼の思索動向、すなわち始源の思索そのものを指す。『存在と時間』公刊部において途中まで実行されたこの試みを、ハイデッガーは、『存在と時間』公刊直後の諸論考や諸講義のなかで、「形而上学の基礎づけ」と呼び、それを『存在と時間』構想の目的として明確に定めてい

る。この「基礎づけ」こそ、ハイデッガー自身にとっての形而上学の問題に他ならない。

だが「基礎づけ」といっても、それは何か不安定な「形而上学」という歴史的文化遺産を増強したり、維持・保持するために新しい土台を後から差し込むことではなく、あるいは頑丈な基礎を打ってその上に新しい「形而上学」を構築・導出することでもない。ハイデッガーの言う形而上学の基礎づけとはそのような定礎のことではなく、むしろ形而上学そのものの隠れた諸基礎、つまりそこから形而上学が発源して展開してきた歴史的な根拠・根源を、長い伝統のなかで凝り固まってしまった根本諸概念の解きほぐし・解体を通じて、再び露わにすることである。その意味でこの「基礎づけ(Grundlegung)」は、哲学・形而上学の埋もれた「根拠を-発掘すること(Grund - Freilegung)」とも言われる。

本論文の目的は、『存在と時間』から始まるハイデッガーの始源の思索を追究することにより、形而上学の基礎づけというこの試みの一端を解明することである。そのなかで『存在と時間』が途絶した理由、いわゆるハイデッガーの「挫折」問題に関しても、この構想の本質と限界という観点から検討する。

二　各章の要旨

ハイデッガーにとって伝統的に隠蔽されてきた「基礎」とは、「そこから」哲学・形而上学が由来してきたところだけではなく、同時にまた、「そこへ」と哲学・形而上学が向う先でもある。ハイデッガーはこのような「そこからそこへ」の「そこ」、つまり哲学・形而上学の由来と将来が重なる基礎を指して「始源(アルケー)」と呼ぶ。その限りにおいて、形而上学の基礎づけを目指す始源の思索は、本質的に、哲学・形而上学の「由来への帰還」と「将来への移行」というこのいわば二重の始源への歩みを特徴としている。それに対応して本論文の構成も大きく二編(「由来への帰還」・「将来への移行」)からなり、そのなかに全七章が配置される。それらの要旨は以下の通りである。

第一編「由来への帰還」は四章から構成される。

その出発点となる第一章「自己 —— 自立性について」では、『存在と時間』で展開された現存在分析の進展に即して、自己の「自立性(Selbständigkeit)」が主題とされる。ハイデッガーは自立性という語を、およそ「自己」と呼び得るものであれば、伝統的な自我主観に対しても、また現存在の実存的な非本来性／本来性に対しても広く用いており、それがこの書における自己の本質解明を困難にした一つの要因となっている。本章では「立続け(ständig)」という語に注目することにより、これら多様に語られた「自立性」の本質区分を行うと共に、それら相互の連関を「基礎づけ関係」として明らかにしている。この試みは形而上学の基礎づけの端緒として、「自我主観の基礎づけ」の解明を兼ねている。

第二章「他者 —— 友情について」では一転、現存在分析における他者の問題に目を向け、研究課題を「相互解放としての友情」の解明に設定している。その際論者は、他者の本来的な可能性が開示される場面を「先駆的決意性」のなかに求め、そこから、他者との本来的な関係の具体的なあり方を「友の声」と呼ばれる現象に即して明らかする。最終的に、「友情」の成立可能性を歴史的な「伝承」のうちに探るこの試みは、形而上学の基礎づけの一環としては「道徳性の基礎づけ」に相当するものと位置づけられる。

第三章「超越 —— 存在の問いの答え方」では、「現存在の超越」という現象の解明を通じて、『存在と時間』構想の核心をなす「存在の問い」そのものを問題にする。ポイントとなるのは、超越において露わになる「無規定的な存在者」への注目である。そこから、いかにして存在が問われまた答えられるのか、いわば存在の問い方・答え方が、超越論的な「地平的図式」を背景に浮き彫りされる。本章の試みは、ハイデッガーが形而上学の基礎づけの「第一段階」とみなす「存在論の基礎づけ（基礎的存在論）」の「仕上げ」に光をあてるものである。

第一編最後の第四章「神話 —— 始源への歩み（1）」では、『存在と時間』公刊直後に取り組まれた「神話」の問題が取り上げられる。ハイデッガーが「神話」と言うとき、まさしく「哲学の由来」が念頭に置かれており、この由来との「再帰的」なかかわりのなかで、存在論と神学からなる形而上学が生起してきたと指摘している。ゆえに神話の問題は存在論の基礎づけの徹底化であると同時に、形而上学における「神学の基礎づけ」をも担いうるものとして、基礎づけプログラムの最終段階に位置することになる。本章の試みを通じて、『存在と時間』構想の射程が古代ギリシア哲学に留まらず、さらにそれを越えて、遠く神話の領域にまで及んでいることが、証明される。

第二編「将来への移行」は三章から構成されている。

まず第五章「自然 —— メタ存在論の主題」では、由来への帰還の最終局面で出会われる「隠れを好む自然（ピュシス）」という現象に注目がなされる。すでにハイデッガーは『存在と時間』のなかでもときおり、自然科学の対象や道具の自然環境には汲み尽されない根源的な意味での「自然」について言及しているが、『存在と時間』公刊直後にはこの現象をより一層重視するようになる。本章で論者は、この自然が暴力的-超力的な神的性格を帯びた「存在それ自身」とみなされることを確認し、最終的にはそれが、形而上学の基礎づけの第二段階にあたると考えられるいわゆる「メタ存在論」の主題であることを明らかにする。

さらにこの問題と連続して第六章「真理 —— 隠れの現われ」では、「隠れ」という存在それ自身の根本動向を「真理の本質」の観点から考察する。ハイデッガーは、この隠れとの適切なかかわり方・思索の仕方を、「自由」ないしは「あるがままにすること（放下）」と性格づけている。ここに『存在と時間』を主導した超越論的な問題設定の挫折と、それに定位したこの構想自体の方法論的な限界も見出されるわけだが、本章

ではむしろ、それらを始源の思索に徹した積極的な「成果」と捉え、この観点からいわゆる「形而上学の超克」へ向かう思想動向を跡づけている。

そして第二編の最後であり、本論全体の締め括りにもあたる第七章「詩作 —— 始源への歩み（2）」では、1930年代中盤から始まる一連のヘルダーリン読解に取り組んでいる。ヘルダーリンへの接近は、『存在と時間』構想の「挫折」が導く新たな思索領域を探求するためである。ハイデッガーは、形而上学とは別様に存在を理解するヘルダーリンの詩作のうちに「別の始源」への移行という重要な思索のモチーフを見出す。それとの対比で、ギリシアの神話や自然（ピュシス）は哲学・形而上学がそこから由来した「最初の始源」に位置づけられるが、これら二つの始源は無関係なものではない。既在するギリシアの「最初の始源」は将来のドイツの「別の始源」に向けてよりラディカルな仕方で取り返される。論者はここに、ハイデッガーの思索を決定づける「二重の始源への歩み」を指摘する。ヘルダーリン読解を経ることで、形而上学の基礎づけを目指す始源の思索は、「由来への帰還」から「将来への移行」へと変様するのである。けれどもこの変様は決して『存在と時間』構想の破棄や否定などを意味せず、逆にこの構想自体のより始源的な再設定として明らかにされる。

三　結論と展望

本論を通じて『存在と時間』から始まるハイデッガーの始源の思索は、次のような二重の始源への歩みとして解明される。第一に「形而上学の基礎づけ」を目指して、哲学・形而上学がそこから由来してきたギリシアの始源へと帰還する歩みであり、最終的には神話の問題にぶつかる。第二に、ヘルダーリンの詩作が準備する「別の始源」への移行の歩みであり、そこではギリシアの始源・神話も「最初の始源」として、この移行への歩みのうちに取り込まれる。つまり、第一の道程・「形而上学の基礎づけ」は、第二の道程・「別の始源への移行」へと変様するのである。こうした二重の始源への歩みは、思索の事柄である「存在の真理」から見れば、既在する異郷ギリシアのピュシスを、故郷ドイツの自然へもたらすことで、新しい神々の到来に備えることとして規定される。そこに、哲学・形而上学の「そこからそこへ」の「そこ」、すなわち由来と将来という二重の始源に定位したハイデッガーの思索の使命が見出される。本論は最終的に、ハイデッガーの始源の思索が、「既在するギリシアから将来のドイツへ」という歴史的なプロセス・移行を企図し、その準備にあたるものと結論づけている。

もちろん、この場合のギリシアとはドイツを含む「西洋的なもの」の最初の始源を意味し、それゆえこの歴史的な移行も第一義的には、あくまで「西洋」に限定した事柄・問題として理解しなければならない。にも拘わらず、ヘルダーリンはギリシアのうちに「東洋的なもの」を見出しており、ハイデッガーもそのことを承知している。そうすると、ヘルダーリンの詩作に随伴するハイデッガーの始源の思索にはまた、西洋と東洋との歴史的な連関が、たとえ目立たない仕方であるとは言え、いわば溶け込

んでいるとも考えられる。本論は最後の「結びにかえて」のなかで、ハイデッガーの老子への言及を典拠にしながら、この問題について若干の考察を加えている。「ハイデッガーと東洋思想」というこの大きなテーマはほとんど未開拓の領野であるが、ボーダレス化がすすむ今日の世界状況を鑑みれば、その重要性は今後ますます増大してくるというのが論者の考えである。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、マルティン・ハイデッガーの哲学思想全体が一貫した主題をもっていると解する立場から、その主題を徹底的に追究することを目的としたものである。論者の考察の立場は、ハイデッガーをして「存在の意味への問いを新たに立てること」へと駆り立てさせた哲学史的な洞察に着目することによって確立されている。その洞察とは、西洋形而上学の始祖であるプラトンにおいてさえ存在の問いに対する答えが欠けており、それ以後の哲学史の展開においても存在への問いが適切な仕方で一度として立てられたことはない、というものである。この立場に立って、論者はハイデッガーの存在の思索が「すべての哲学の問いの始源」への歩みであると捉えるのである。

本論文の意義は、以下のようにまとめられる。

第一は、近年におけるハイデッガー研究の重要な論点の一つである形而上学概念の位置づけに関して、明確な読み筋を提示した点である。論者は、ハイデッガー哲学をまさに、形而上学がそこから由来するところへの帰還と形而上学がそこへと将来するところへの移行という二重の歩みとして捉える。ハイデッガーの哲学思想が一貫したものであるか否かはハイデッガー研究においてたえず問題となるが、それはハイデッガーの思索の歩みが「転回（ケーレ）」と呼ばれる大きな変容を経るからである。この「転回」をどのように捉えるかによって、ハイデッガー解釈は大きく異なってくる。そしてこの「転回」をどう捉えるかということは、『存在と時間』が未完に終わった理由をどう解釈するかということと密接に関わっている。

論者はハイデッガーの著作や講義録に散見される「形而上学」という語の用い方を丹念に拾い上げて、その意味を探索することによって、『存在と時間』の構想を取り出している。そしてその構想を「存在の問いの超越論的地平の獲得」を企図するものとし、その企図を「現存在の形而上学」によって遂行しようとしたと捉える。現存在の形而上学は形而上学の基礎づけをめざすものであり、第一段階の「基礎的存在論」と第二段階の「メタ存在論（形而上学的存在者論）」から成る。第一段階の「基礎的存在論」は「現存在の分析論」と「存在のテンポラールな分析論」を含み、前者の「現存在の分析論」に当たるのが公刊された『存在と時間』第一部第二編までであり、後者の「存在のテンポラールな分析論」が未公刊の第一部第三編として予定されていた。そして、「存在のテンポラールな分析論」を遂行しようとしたときに「転回」が起こり、テンポラールな分析論の遂行ではなしに、第二段階の「メタ存在論」の遂行へと導かれたというのが、論者の解釈である。論者の解釈の独自性は、この「転回」を形而上学の根本問題の変容として捉えている点に顕著に現れている。つまり第一段階では、形而上学の主題は存在者そのものと全体としての存在者という二重のかたちをとっていたのに対して、第二段階では全体としての存在者そのものという仕方で統一的に現れると解するのである。これは、ハイデッガーが明確に語っていないところまで大胆に踏み込んだ解釈であるが、その解釈に導かれて論者は、これまであまり注目される

ことのなかった問題を掘り起こすという成果を挙げている。その成果が論者の大胆な解釈に説得力を与えている。

その成果とされるものはまず、従来の研究においてあまり注目されてこなかった神話の問題を取り上げ、神学の基礎づけという意味をもつメタ存在論のうちに位置づけたことである。これが本論文の第二の意義である。『存在と時間』公刊後のいくつかの講義において、ハイデッガーは繰り返し神話の問題について扱っている。しかし、この問題はこの時期の彼の論考のなかではある種異質なものと見られ、神話の考察の位置づけは難しいものがあった。論者はハイデッガー哲学の構想を形而上学の基礎づけと捉えることによって、その最終局面において神話の問題が重要な役割を果たしていることを明らかにした。その考察の過程はきわめて魅力的であり、示唆に満ちている。

さらにもう一つの成果として、神話の問題の位置づけと連関する仕方で、自然という問題をメタ存在論の主題として明らかにしたことが挙げられる。これが本論文の第三の意義である。「プラトンにおいてアレーテイア（真理）という語が由来する根本経験は、すでに消失してしまっている」と語るハイデッガーは、ヘラクレイトスの「自然は隠れることを好む」という言葉のうちに「隠れ」の根本経験を見て取り、この「隠れ」が「隠れ-なさ」としてのアレーテイアの本質に帰属すると見なす。論者は、この「隠れ」の根本経験を神的な自然の直接経験として理解し、この神的な自然を形而上学がそこから発する始源として考察している。「自然暴力」や「超力的な支配者」といったハイデッガーの用いている言葉の分析を通して、「隠れ」の根本経験を描き出す論考には、論者の個性が光り、読み応えがある。

第四の意義は、『存在と時間』のなかで何気なく用いられているように見える“ständig”や“Ständigkeit”という語に着目することによって、実体的な「自我の同一性」の存在論的な根拠に実存的な「自己の自同性」を見出すハイデッガーの洞察を跡づけたことである。これは論者の言葉のセンスが活かされた考察であり、従来の研究にはない視点である。この自立的な自己の立場が本論文の最初の章で確立され、それがその後の考察がたえず立ち返る基点となっている。

以上のように、本論文は従来の研究ではあまり注目されなかった言葉や事柄に光を当てて、ハイデッガーの著作の紙背まで読み取ろうとした意欲作であるが、それだけに、そこには批判を呼び起す可能性のある点も含まれている。本論文の考察には、ハイデッガーの論述のなかに自分の解釈を読み込んでしまう危うさが、ときに見受けられるのである。しかし、それは既成の解釈の枠にはまらない大胆な思索にはどうしても伴うものであり、本論文の価値を大きく損なうには至っていない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成24年4月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。